

* 目次 *

第一章	迫害者パウロの回心——ダマスコのキリスト体験……………	9
第二章	ファリサイ派の人と徴税人の祈り……………	25
第三章	回心への道程……………	47
第四章	原始キリスト教におけるアンテイオキアとエルサレム……………	77
第五章	パウロの第一次伝道旅行……………	94
	セレウキア、キプロス、ペルゲ、アンテイオキア、イコニオン、リストラ、 デルベ……………	
第六章	パウロの第二次伝道旅行……………	113
	タルソス、キリキアの峽門、デルベ、リストラ、トロアス、ネアポリス、 フィリピ、テサロニケ、ベレア、アテネ、コリント、エルサレム……………	
第七章	パウロの第三次伝道旅行とローマへの旅……………	158
	タルソス、エフェソ、フィリピ、コリント、エルサレム、マルタ、ローマ……………	
あとがき……………		182

《井上洋治アーカイブス》

〈対談〉「小さき聖アレジアの跡を追って……」(遠藤周作／井上洋治) …… 185

〈対談〉「漂泊の風の中に聖霊を感じている……」(遠藤周作／井上洋治) …… 201

コトバの使徒(若松英輔) …… 216

〈井上洋治 人と思想〉③(山根道公)

詩歌が生まれるキリストの道——日本の自然観との響きあい …… 230

装幀 熊谷博人

第一章 迫害者パウロの回心——ダマスコのキリスト体験

シリア砂漠の澄みきった空気のせいだろうか、アンチレバノン山脈に沈む夕日はすばらしかった。

ダマスコ（現在はダマスカスと呼ばれている）のホテルの三階の窓から、私はいつまでも静かな夕焼けの空を眺めつづけていた。

来るべきところへ来たな、そういう思いであった。

何か不思議な目に見えない糸でたぐられて、今日ここでダマスコの夕焼け空を眺めているのだという思いに、ずっと私はとらわれていた。長い間、パウロの心に映ったキリストの姿を夢中で追い求めてきた私にとって、このダマスコはいつかは必ず訪れなければならない町であった。

花のさしてない、テーブルの上の一輪ざしの影が次第に長くなっていくにつれ、さっきまで赤かった夕焼けの空は、次第に赤紫色に染まってくる。そして、あちこちにともりはじめた町の灯が、どこかに忘れ去っていた郷愁にも似た思いを私の心によみがえらせてくれる。日本からみればちょうど地球の反対側にもあたるこのダマスコの町の灯のもとも、やはり同じ人間としてのいとしい、そして哀しい営みが毎日くりひろげられているのにちがいない。

小さいときから、私はほんやりと空を見上げることがたまらなく好きであった。白い雲の浮かぶ澄んだ青空、どんよりと灰色の雲におおわれた雨模様の空、そして夕日が沈んでいく夕焼けの空。空にはそ

れぞれの顔がある。私はどの顔も好きであるが、特に夕焼けの空は、いつも何か、しつとりとあたたかく私の心を包みこんでくれるように思うのである。

フランスの修道院に入会することを決めた教会からの帰り道、田園調布の公孫樹いちょう並木から眺めた夕焼けの空も、滞仏八年後に日本帰国を決意したとき修道院の部屋からみたリールの町の夕焼けも、ガリラヤ湖のぼんやりとかすんだような淡い夕焼け雲も、そしてこのダマスコの澄み透った夕焼け空も、みんなひとつになって、幼稚園のときに母に手をひかれながら眺めた、あの踏切りの夕焼け空に重なっていくような気がするのである。

もうダマスコの町は完全に夕闇にとざされ、町の灯がきらきらと点滅している。遙か左手に南北に走っている街の灯が、イエスの愛したガリラヤ湖から、遠くエルサレムに通じるダマスコ街道の灯であるにちがいない。

ダマスコの町の南西一五キロメートルほどいったところに、カウカブという名の村がある。二十年ほどまえに、このカウカブの地からビザンチン時代のランプが発掘された。そのランプに「ここはパウロの回心の地である」と記されていたところから、このカウカブがパウロの回心の地であるということになり、ここにロシアおよびアンティオキアの東方教会の総主教の援助で、一九六五年に小さな教会堂が建てられた。私がこの地を訪れた一九八四年には、イスラエル・アラブ戦争でシリアの兵隊たちがこの教会堂にたてこもって戦ったらしく、教会の内部は無残に破壊されていて、羊や山羊の汚物で足のふみ場もない有様であった。ただ教会の外側に、教会堂を取り巻くように円形の白い大理石のアーチが残っているのがせめぎあいの慰めであった。

イスラエルとの国境、ゴラン高原まで四十数キロメートルの地点に位置している関係上、附近は重要な

軍事基地となっており、写真は一枚もとることができなかった。銃を肩にかついだシリア軍の兵士が教会堂の周囲を警戒にあたっていた。大理石の破片の散らばっている教会の前庭からは、遠く雪をいただくへルモン山系が、澄んだ青空にくっきりとその雄姿をうかがわらせていた。緑の島の中をゴラン高原へと通じている茶褐色の道が、かつてパウロが何回か通った道であり、光を浴びて倒れた道であるのにちがいがなかった。

その道の上を、重装備の装甲自動車が重苦しい音をたてて通りすぎていった。

正確な年代はわからない。おそらくは紀元三二三年か三三年頃のことであつたらう。熱心なユダヤ教徒であり、ファリサイ派¹とよばれるセクトに属していたパウロは、ユダヤ教徒にとつて絶対であつた「モーセ律法」を軽んじているようにみえるキリスト教徒の行動をどうしても許すことができなかった。キリスト教徒の迫害にふみきつたパウロは、逃げるキリスト教徒を追つて、シリアのダマスコの町までやつてきたのである。その間の事情をパウロ自身、『ガラテヤの信徒への手紙』一章一三―一四節で次のように語っている。

あなたがたは、わたしがかつてユダヤ教徒としてどのようなふうなまっていたかを聞いています。

わたしは、徹底的に神の教会を迫害し、滅ぼそうとしていました。また、先祖からの伝承を守るのに人一倍熱心で、同胞の間では同じ年ごろの多くの者よりもユダヤ教に徹しようとしていました。

1 前二世紀頃―後一世紀に存在した、ユダヤ教の一派。口伝律法も成文律法と等しく重んじ、律法解釈を尊重した。

《井上洋治アーカイブス》

〈対談〉 「小さき聖テレジアの跡を追って……」 (遠藤周作／井上洋治)

シスターお家騒動

遠藤 ぼくは君との対談を、もし編集部がシスターがおゆるしになれば、二回ぐらいやりたいんだ。まずきょうは、君がどうして神父になったか、という話をお聞きしたい。

井上 なんで神父になったかというのはむしろかしいねえ。

遠藤 ぼくの記憶がまちがいでなければ、君はお姉さまがシスターにおなりになったでしょう？

井上 そう、サンモール会のね。

遠藤 お姉さまがシスターにおなりになることについて、距離感はありませんでした？

井上 ありましたね。

遠藤 その時は中学生？ 高校生？

井上 最初に話を聞いたのは高校生の時だけど、姉が入会したのは、大学一年の時。

遠藤 反対とまではいかないけれど、なんでもいいものという感じ？

井上 いや、とにかく何が何だかわからないけど、大変だったという感じですか。おやじはとにかく絶対反対してたし。

だって、日本人の感覚から言うと、尼さんになる人というのは世をはかなんでなるという感じだか

〈対談〉「漂泊の風の中に聖霊を感じている……」（遠藤周作／井上洋治）

贖うことの意味は

遠藤 神父さんはこのごろ聖パウロの研究をされているけれど、聖パウロを日本的感性の中に包みこむというのは、ちょっと水と油のような気がするけれどねえ。パウロ神学はやはりユダヤ教的なところがかなり残っているから。しかし、パウロは異邦人を——ヘレニズムを大きく包みこんでいますね。そこにあなたは心ひかれたかな。

井上 それはそうですね。今の日本の状況とダブルとところがあるから。研究なんておこがましい。ただちよっと勉強をはじめたばかりだけれど、ぼくは、アレキサンドリアのフィロンをもっとやらなければいけないんじゃないかという気がしている。反対意見の人が多いようだけれど。——ディアスポラのユダヤ教というのは、やはりヘブライズムとヘレニズムの接点としての意味があると思いますね。ヘレニズムの中に生きたユダヤ教というのは、当然変化してくる。そういう、変化したものからさらにパウロは影響を受けていると思うんです。

遠藤 パウロよりヨハネのほうは、興味ありませんか。

井上 いや、大いにありますよ。

遠藤 ぼくはどうもパウロ神学の中にある贖罪観というのが、実感としてよくわからない。いや、「贖罪感覚」というのはあるんだけど、ぼくには、いけにえ感覚がないんですわ。イエスがわれわれの罪を背負ったいけにえになったという考え。あれは日本人として、違和感があるような気がす

コトバの使徒

若松 英輔

1 パウロの回心

「キリストを運んだ男」とは、著者である井上洋治によるパウロ（生没年未詳。一世紀初―六〇年頃）を指す呼称だが、この表現は、じつによくこの人物の生涯を活写している。

ダマスコでの回心のあとパウロは、自らを使徒であると考え、イエスの没後の弟子であるという自覚と共に生きた。福音書に出てくる十二人の弟子とは異なりパウロは、人間の姿をしたイエスを知らない。ダマスコに向かう道で彼が経験しているのは、文字通り、「キリスト」となった、あるいは光の姿となったイエスとの邂逅である。

当時パウロは、キリスト者を迫害する者の、それも急先鋒の一人だった。だが、この出来事のあとパウロの生涯は方向が、というよりも、その地平自体が変わる。それまでは否むべき相手だったイエスの言葉を運ぶことが、パウロの生涯を賭して行われる使命になっていったのである。本書には、ユダヤ人パウロがキリスト者となり、殉教するまでの日々が論じられている。

〈井上洋治 人と思想〉③

詩歌が生まれるキリストの道

—— 日本的自然観との響きあい

山根 道公

『キリストを運んだ男』

『キリストを運んだ男』は、一九八七年三月、講談社より書き下ろし作品として刊行される。この講談社版が版切れになったのを機に、一九九八年一月、新装版が日本キリスト教団出版局より刊行される。その際に付された「あとがき」は、本巻の本文に付されている。

最初の講談社版には次の「あとがき」が付されていた。著者の本作執筆の背景にある思いやパウロに関して参考にした文献が記されているので、全文を掲載する。

あとがき

三十年以上も、ずっと、日本文化の土壤にキリストの福音の花を咲かせたいと願ひ、それを模索し続けてきた私にとって、パウロという人物は、いつも大きく目の前に立ちただかつてくる存在であった。それは

一つは、ナザレというパレスチナの寒村で育ち、緑と水のゆたかなガリラヤ湖畔周辺で主に活躍したイエスのイメージとは違って、燃えるような烈しい性格と高い教養を持ったパウロに、どうもいまひとつ親しみを感ずることができなかったからであったが、しかしまた同時に、イエスをキリストであり主であると信じるキリスト教信仰に、どうしてもパウロという人物は無視しえない中心的存在だからであった。

もう何年前のことになるだろうか。ある会合で私はユダヤ教学の権威である石川耕一郎教授と同席する機会をえたことがあった。そのとき氏は、キリスト教の学者たちとは一味違ったパウロの見方をしているというサムエル・サンドメルという、ヘブル・ユニオン大学教授について話され、その人の著作を読んでみてはということ私にすすめてくださったのである。

数々のパウロに関する著作に接しながらも、新約聖書の全体的把握にいまひとつピンと来ていなかった私は、よろこんで氏のすすめに応じることにした。絶版になって今手に入らないというので、ご親切にも氏が全部コピーして送って下さったサンドメルの著作『パウロの天才』をむさぼるように読みふけた私は、まさに目からうろこが落ちるに似た知的開眼を